

[研究ノート]

1900年パリ「図画教育に関する万国会議」報告書

Congrès International de l'Enseignement du Dessin Tenu de 1900 à Paris, Procès-Verbaux Sommaires.

佐藤 淳 介

Junsuke Sato

はじめに

明治初頭、わが国近代学校設立の際に導入された科目「幾何学罫画大意」はその後「罫画」そして明治14年「図画」と改められるが、その内容は、この名称に端的に示されているように鉛筆による〈正確な描写〉に他ならない。その後、経済的なこともあり鉛筆画から毛筆画が主流となるが、その毛筆画においても、その目指すところは、あくまでも〈正確な描写〉であったといえる(中村隆文『「視線」からみた日本近代』2000)。大正期の自由画運動で批判を浴びる「臨画」が、広く行なわれていたのも〈正確な描写〉という「図画」の趣旨から当然のことであった。

こうした〈正確な描写〉＝「図画」というとらえ方の一方で、「表現」「感性」を重視した美術教育が対置される。チゼックや山本鼎に代表される〈正確な描写〉という範疇を超えた美術教育・認識は二十世紀の多彩な芸術表現ともつながっている。わが国の美術教育が〈正確な描写〉から出発していることは、その手本となった西欧のそれがまさに産業上の技術者の養成にあったからであり、その内容は「アート」とはかけ離れた「テクノロジー」であって、「訓練」そのものであったと指摘されている。(山本朝彦他『〈感性による教育〉の潮流』1993)

筆者は、この2つの「図画」に対するとらえ方が、後者が前者に変遷していくという発達史的な見方からではなく、ある緊張関係を持って、その両者が今日の美術教育にまで連綿と存在し続けているのではないかと考えた。それは、〈正確な描写〉＝「図画」という時代が「表現」「感性」を完全に無視していたわけでもなく、現在であっても「表現」「感性」の基本のところまで〈正確な描写〉＝「図画」とするとらえ方が、そのよし悪しは別として、存在していると考えからである。

この報告書は、チゼックや山本鼎の実践と、時を同じくして、当時の美術教育の実態と限界、そして改革の方向を特徴的に示しているといえる。当時の〈正確な描写〉の意図していた教育の姿をいま一度ニュートラルな見方で、検証する必要があるだろう。

「図画教育に関する万国会議」

この会議は1900年のパリ万国博覧会の際に開かれたもので、詳細な経緯等については松本健義氏が論文「国立国会図書館蔵本『千九百年万国博覧会ニ於テ図画教育ニ関スル万国会議』に関する資料的考察」(山口女子大学文学部紀要1)で明らかにされている。

この会議の報告書は文部省総務局によって編集され明治35年に出版されている。

特徴的なことは、その抜粋が当時創刊されたばかりの雑誌『図画教育』に転載されていることである。『図画教育』は東京美術学校内にある図画教育会によって明治37年に第1号が創刊されている。この報告は、その創刊号から連載されている。そして、それは東京美術学校の白濱徴によってさらに文部省講習会で報告されている。白濱徴は後に国定図画教科書『新定画帖』を著すが、この『新定画帖』はわが国の美術教育の画期となった教科書であり、その後の美術教育に大きな方向性を与えたものであったことは事実である。この白濱の教科書『新定画帖』には時期的に見ても、少なからず報告書からの影響があったことは想像に難くない。そこでこの報告書から、当時の西欧の美術教育が如何なるものであったか、問題点、改善方法について、その具体論を通して、当時の「図画」の範疇を、正確に読み解くことが必要であると考えるのである。

当時の美術教育が「アート」とはかけ離れた「テクノロジー」の「訓練」だけであったのか。どこまで、その限界に気付いていたのか、いなかったのか。当時の「臨画」の指導とは如何なるものであったのか。

本研究ノートは、同「報告書」がわが国の美術教育史に大きな示唆を与える資料であるとの認識から、その内容の現代語訳を試みた。当時のわが国の教員に直接目にする機会が多かったであろう雑誌『図画教育』をテキストとし、紙幅の許す限りでその一部を訳出した。なお、内容によって意識・簡約化した部分がある。また、誤訳等があれば指摘いただければ幸いである。

【報告書本文】

普通教育の部

図画を義務教科とする必要性

報告者、Wheeler (米) ・ Chatrousse (仏) ・ Bonnard (Privas)

第一報告

1

知覚・解釈・判定は、精神の自然発達における3段階である。視覚は光線・陰影・形相・色彩・体勢を感じ、われわれと物体及びその性質との間に関係を作る。しかし物の形相・構造・品性などを速やかに判断するためには、単にその物を見るだけでは足りない。必ず一層の注意を持ってその物の全体及びその細部について、またこれを取り巻く諸物との関係についてその大要を解釈しなければ欠点と品質とを判定することができない。図画は精神に事物の分析をさせるものである。

したがって、図画はわれわれの精神に周到な観察・迅速な推理・完全な分析・正確な解釈・明瞭な観念・真実な判断・正常な大略などを行なう習慣を養成する顕著な効力を持っている。

2

図画は物の形相を説明して、その観念を表彰するために用いる一種の書記的言語であり、図画はまた真正に形相を複写するために誰でもこれを理解しない者はいない。つまり、絶対的で完全な世界語の用をなすものはただ図画だけである。

図画はすべての教科、すべての学術を補うものであり、図画と文学とは並んでその必要を証明することは難しくない。この2教科はともに同一の目的を達するために同一の手続きをとるだけでなく、それらが発達させようとする精神の品質も同じである。

試みに二人の生徒を並んで座らせ、一人には犬を見てその状態を叙述させ、もう一人にはこれを描写させると、この二人の生徒はともに同一の順序でこれを行なう。すなわち、まずこの動物の姿勢・つりあい・種族を明らかにする大まかな形を写し、その後、重要度によって段々にその細部におよび、そしてその結果を眼中に映すのである。

前者は言葉によって事物の感想を示し、後者は線によってするという差があるだけである。

人は文学の記述を評するとき、よくその事物を描いたと言い、よくその形を写し得たと言い、あるいはよくその姿勢もしくは色彩を示し得たと言うのは、普通に用いられる当然な言葉の例であって、それらはおのずと図画と文学との間に、映し出そうとする効果が相関関係にあることを示している。

地理の学科では図画の知識は必須で欠かせないものである。いま一国の位置・その境界の形状・河川またその他の小流・山岳・国郡の区画・動植物・生産物・人種などは図画によることが明白であることは説明に及ばない。もし地理の教科書に図画を付けなければ、いたずらに言語を配列することになって真の目的を達することができない。

現代教育の基礎となる多くの書物は、その本文に図解を付けなければ、もっと理解できにくいものとなるだろう。

歴史は地理と密接不可分なもので、これも非常に図画から得るところがある。年表・地形図・歴代の風俗や人種・衣服・家屋・兵器・美術品・工具・家具・歴史的建造物の様式などの挿絵はみな文明の歴史を精神に印象付けるうえで強大な効力がある。

各種の理数系の学科では、その仮説の理論を判定するのにも図法の助けによって、直ちにその形体を思い描くことができ、またすべての抽象を確実なものにし、したがってすべての定論を明らかにするものが図画である。

化学・物理学・植物学・内科外科の医学などにおいても、壁面の掛図その他広く工業に関係する各種の図画が用いられて、非常にその講義をわかりやすくしている。

物体・植物・器械・組織物の特質に関して、図画又は実写図を用いてその説明の根拠としないような教科が今日あるだろうか。

工業上では下絵図によらなければ十分な確実性を期し得ない。たとえば一つの器械を作り、家具もしくは織物を製作するときには、あらかじめその構造を理解させる配置・模様および色合いを示す図画がなければその実を挙げることはできない。

刺繍・編み物・毛織物・裁縫・流行品などのような女子の技芸と称する様々なものの女子手工において、その様式・調整・趣味を決めるうえで最大の補助となるものが図画であることを認める。

このように図画は諸般の事に基本的な用をなし、人の思想を実質の形に具備させる創造的な効力を持っている。

これは、すべての職業の根本である小学校において、図画をその教科の筆頭に置かなければならない理由である。

3

観察力を発達させ、手の能力を養成して、真実にその思想を実地に施すためには、また図画を授けて、純正な趣味を涵養し、勞せずに審美の見解を強固にすることに努めるべきである。したがって図画科はつねに普通美学に基づいた説明を添えるべきである。このことに関しては美術の名品を比較研究することで実に教育上有効な一手段になるという。しかし各国いずれの時代にお

いても傑作が生まれるということはなく、その美を理解することが国と時代とによって異なることから、いわゆる傑作というものはいたる所にはない。自然は常に一切の美の唯一真正な淵源であり、その人を鼓舞奨励する際に、その人の気質に従ってその趣を異にするもので、常に他の傑作を創作する便宜を与える。私の考えによれば芸術の資料はただ自然にあり、技芸家は各々自分の所見に従ってこれを訳出する任務を負うものである。古人の傑作を知ることが卑屈に拘泥してこれを模倣するためにあるのではなく、その蘊奥を究め得て、よく精神の産物を健全に判定して、審美の心を養い、美のあるところを常にそれを査察査察するに足る研究をすることにある。

以上の理由によって図画科は公立各段階の教育において義務教科として課すべきものであるといえる。

図画は普通教育中で中重要くらいの位置に置くべきものである。

結論および決議案

すべての学科はいずれの国においても、検定を受ける必要を認めて、いたる所で試験の制度を設けている。この試験に関しては図画科を除外する理由は無い。図画以外の学科に対して重要な補助となること、またすべての学科と親密な関係があることは私がすでに証明したところである。したがって他の学科と並行させるべきである。

よって報告者は左の決議を公表することを本会議に提議する。

1. 図画はすべての学校において、またすべての試験・競技において義務科として除外することを許さないこと。
2. すべての試験において図画の完全な不合格者は、落第の理由の一つとすること。
3. 一定の学業免許状を取得する目的で通過する試験や競争試験においては特にその学業の目的を考慮して図画の試験をすること。

第二報告

1 緒言

アメリカ合衆国で新教育と称されるものでは、筋道だった練習を重ねて、個々の天賦の性質を利用して、またこれを重んじて、その個性の進歩発達の実を挙げることを期している。

幼児の学校である幼稚園においても、小学校・大学においても、この点における最近二十年間の進歩は驚くものがある。この報告の目的は、アメリカ合衆国においてよく実効を上げたことを述べる。

2 幼児に対する図画

幼児にはその諸能力の自然の発達を遂げさせることを期す。

フレーベルの完全な教育法によれば、その体育つまり筋肉に関することは遊戯を設け、鳥や動物の形または船の揺らぎをまねて発達をはかる。その情緒は音楽で鼓舞する。その意思は模倣しようとする希望によって発達するものであるという。

触感は粘土を幼児に与え、なるべくいろいろな形を作らせてこれを養成する。

色彩の観念は着色した球、または花や各種の植物を用いてこれを発達させる。

築造は幼児においては自然のことで、その小さい築造の実施用の砂場を幼児の学級に常備させるゆえんである。

幼児がはじめに装飾の観念を起こすのは組みひもの標本による。また幼児の愛美心はするべき方法を尽くしてこれを養成することに努める。

3 小学校図画科

過渡期学級すなわち幼稚園・保育満期後小学校の初期第一学年の間は幼児は期せずして一大進歩を呈する。すべて官能を発達させる観念は、たいへんその範囲を広めて、その結果として幼児は自然の著しい発達を生じる。幼児は黒板に文字を書くと同時に、図画を描き、また常に水彩顔料および種々の植物の形、葉・花の簡単なもの、その他野菜のようなものも描き、あるいは一・二の筆でその概容を模写するものもある。また理学・地理の初歩を理解するに至ると同時に、土や蠟を使って物の形を模造させる。

この課業は女性教師が自ら模範を示して幼児を誘導する。私はニューイングランドの学校を観覧すること、その教師の黒板上に平易な物体を描き、あわせてその名称を書くことの容易であること、また歴史を教えると同時にその参考に供する略図の小さなものを見ても驚かざるを得なかった。幼児はこのようにして読書・習字・図画およびつづり字・発音を同時に学習することができる。

したがって教育の初期に図画はきわめて重大な効力をなすと見られる。幼児のもつ創作の天分の程度の高さは予想以上である。また人類の幼時とも言うべき未開の時代に作られた陶器や籠、その他多くの物を見ると、装飾術の傾向があることを発見することができる。この傾向は幼時の初年間に於いて有するもので、装飾は幼時において自然の性情である。私は十一歳の幼児で編成された一学年クラスで十二名に対して十名の生徒が組み立てた装飾模様の最も称すべき物のあるのを見た。

わが諸学校においては、また、おおいに図解を奨励し、女性教師が声高に歴史を講読する間に、幼児は図画で熱心にその解説を試みている。そこで用いられる方法は幼児に好き嫌いが無いとはいえず、「パステル」を用いることが裁量の手段である。なぜならば同時に輪郭・陰影・彩色、言い換えればその形相を表示することができるからである。

十歳の幼児で編成した一学級で、私はその幼児が「イーリアス」および「オデュッセイア」物語の図題であるプルトンおよびプロセルピナ、またはダビデおよびゴリアテの歴史図を容易に描き、とても無邪気な構図をするのを見、またエリザベスのチャンセルの庭園にある図などは極めてたくみで嬌態があふれるような感があり、また8歳の幼児で組織した一学級では物を動かすありさまを描くことのできるのを見た。それは船の帆が暴風に吹かれ、樹木が風に動かされているようなものである。

このような図画でその観念を表象させる方法は精神の活動力を発生するゆえんであり、米国の気候はこの活動力の発達を助けるうえでとくに便利である。季節の変化が大きく、人の目を楽しませるものがある。秋、とくに印度夏と呼ばれる気候の長いこと、巨大な樹木の美観があること、山岳の清涼なありさま、牧野の広く無限の観念を起こさせること等すべてこの天然の偉観は図画があるから生徒がこれを理解することができ、その観念を活起こし、かつそれを養成するに至る。こうした理由があるので私は小学校において図画教育に与えられた地位が極めて称揚すべきであることを認めるけれども、中学校ではそのように言うことができないことを憾む。

四 中学校図画科

(甲) この科の本領

普通教育において中学校が占める地位はきわめて重大であるといわれる。中学校は十三歳の少年が始めて厳格な就学の緒につく所である。観察の習慣・誠実および勤勉の習慣・読書の趣味・理学の知識を得ようとする志望・天然の愛好などすべてで、知識上の資質は小学校においてすでにおおいに発達し、かつその発達については図画の功績が大きく力になっている。生徒が中学校に入ってその新境遇に接するときには、その精神は図画科により受けるところの利点および快樂も従前に比べて一層多い。厳正な学科に従事することが長時間にわたるといえ、その修める科目に関する図画をその間に加えるときは、疲労を覚えることがそれほど甚だしくはない。歴史その他の読書は構図の材料を与えるものが多く、幾何および遠近法は脳裏の精密な再現を助ける。またこのときに少年生の思考を支配する創意の原則は手技の表現で言語の表現を助けることであるから、いっそう速やかにかつ明白にそれらを理解することに至る。

直観力が教育の主要な一部は科学の推理のみならず、すべての知覚は中学校において同時にこれを発育させるべきで、そのような時、少年生は図画の実習によって養い得た表意の能力があるために同化の力を持つことが一層多い。

したがって図画教育は中学教育に対して重大な義務を負っていることが、フレーベルの児童に於けるやり方のようにである。少年生の多くは今なお言語で自分の意思を表す力が無いが、その言語の足りない所は、べつに具わった自然表意の源泉に求めることができる。(すなわち図画である)しかし、この精神薫陶の期間でこのように付与した図画の助力が優れて知力の発育に資することに、世間ではいまだかつて知られていない所なのである。

(乙) その検定法

私は、ここに論ぜなければならない大問題がある。すなわち義務科および随意科の問題がそれである。

中学校は、アメリカ合衆国においては他の諸国と同じく二つの目的を有している。一つは大学に入る予修をなすことで、一つは中学のみに止まる者のために必要な教育を授けることである。

第一の場合に対しては、常に数種の随意学科がある。

第二の場合に対しては、なおこれに増設するべきことを論ずるものがある。私は図画を中学校の最終試験の二科目中に加え、少なくともその随意科の一つとする時期が近いことを希望する。また大学入学試験に図画の科目を設けることを要する。そうでないと中学校での最終試験の科目中にこれを加えることの原因がなくなるからである。

アメリカにおいては「ハイスクール」および「アカデミー」を中学校の部類に包括している。二校とも大学の予科を授ける所で、生徒の年齢は十三歳ないし十七歳としている。あるいは十八歳に至る者もある。

(丙) その結果

教則と学科課程との間に、密接な関係を維持する上で注意する必要があるのは、この中学校である。眼と手との助けによって、すなわち図画で観念と事物との表現を普通教育の主要な部分と

しなければならないのは中学校であり、その理由は左のとおりである。

第一 図画の練習は自然の傾向を発達させる。なぜならば図画によって事物を叙述することは人類の本性だからである。

第二 修業時間を利用することに一層配慮し、その学科程度で幼児の年齢に適させるときには数学でも理学でも歴史でも同一時間にして得るところがとても多い。余裕の時間の一部で図画に当てるときは、おおいに正確な観察の能力および事物の関係、秤の感覚を発達させるに至る。これはすべての他の学科に対して必要な資質である。

第三 図画は抽象によらず具体的に推理することを教える。これがその有益なところである。

第四 図画は明確な表意の習慣を生む。

第五 図画は心意集中の習慣を養う。なぜならば手と眼とその働きを共にするとき、意識を一ヶ所に専念して、平等な働きの習慣を養成するからである。

第六 図画は個人的性質に資する所がある。なぜなら個性の差異は図画においても基本の資質として保全すべきものであることは芸術その他の学業と同じである。教育者はこれを表彰すべき種々の方法を求める必要がある。図画はこの方法の一つであり、また無視できないものである。

第七 図画は考案の精神を鍛錬し、また自然の写実によって創作力を鼓舞する。

第八 歴史および地理は図画で一層の興味を生む、したがって心にこれを考案して、慣熟した手でこれを描写する影像があることで明快さが加わる。

第九 科学その物において図画は絶対必要である。ただ必要なだけでなく科学と図画とは互いにあい助け合う。したがって世の学者の多くは苦心して描いた図の輪郭が極めて下手なものがあるが、それは、その手が未熟で図画の素養がないことを表している。これに対して画家も構造の確実な氣勢を得る域に入るためには、理学ことに生物学の諸科の知識を研究する必要がある。

以上の理由にさらに次の数条を加える。正確な線形の感覚と曲線の美、およびその秤のようなその他いっさいの装飾の重なった素は植物学に由来する。解剖学と美術との親密な関係は、人の知る所でありここでそれを論ずる必要はない。

美術家にその構図の大線を図作させる思いを起こさせるものは、幾何学・天文学の永遠の真理である。少年の思想を活起こさせるのも、またこの真理である。

小学校図画課程（第五議題小学校図画科第三報告中抜抄）

報告員 De Labouret

△ 視覚の観察およびその必要

小学校（初等科、中等科および高等科）図画課程は幼児学校の課程と同じくその視覚的鑑識を主とする。これは教科の全部を通し図画の講修上必要な要素と認めるからである。

△ 視覚的観察の手工的観察に対する優位

物を認識する上においては、視覚的観察が優れているので、生徒はその講究する物体を取り扱うに当たって、これに接触してすぐにこれを観察させるときといえども視力的観察のみでその各部の詳細な配置を解説することができる。

△ 見取り図および幾何画の練習

この科は小学校の各学級において3か月ごとに一回の試験を設けてこれを承認するもので、その最後の試験すなわち各学級の学年末の試験においては見取り図および幾何画の二種を課す。生徒は普通の物体の一個もしくは一組の前で、それを見た外貌に従ってこれを複写する。

後にこの外形を講究して各自の模本を組織する要素およびその真の配置を詳らかに解説することができて、懸腕（執筆者注 筆をまっすぐに持ち、腕をあげ肘を脇の下につけないで、字を書くこと。運筆が自由であるため大字を書くのに適する）で行なう幾何画によって平面および正面を写し、必要がある場合には眼中にある物体についてその一個もしくは数個の側面もしくは断面図をも写すものとする。模本の要素がその真の形を示さずにたまたま異様な観相を示しているときは、これらの要素については各々その正確な形の真の性質によってその断定を下すこと。

すでに、そのようにするときには、平面では正しい形だが不正の観相を示すものも、われわれがなおその幾何学的形状を認識するわけは、畢竟自然に現れているところのものを利用するからに他ならない。

このようにまったく直感的変更を努めるときたまたま異様な観相を示しているものがあるときは、記憶というものがありわれわれに各物体についてさらにその特質を発見させる。またその各個の物体とその表現で示される形との間には常に関係が存在していることを実地に証明するものである。

この種類の実験を重ね、かつこのように組織立てられれば生徒に単に眼の助力だけで物の確実な識別をさせその要素を分析させる習性を養成させることができる。

△ パリ市制定図画課程の特色

パリ市図画課程の性格を解説するにはここに記すべきことがある。すなわちその課程は児童の知覚力の進歩に従ってその観察の度合いを定めたものだという事である。その教則はもっぱら実験的な体裁を持っているようである。

△ 師範学科

男性教師および女性教師において、このような実験的な傾向のある学科課程を適用させるには、十分な予習を受けていない教員にとっては、まさに難事である。これは通例小学校の学級担任に関する事実であって、このような教師はたとえば師範学校でまったく方針の異なる教授法学習の影響を受けたものがある。あるいは尋常および高等免許を受けた教員でさえも教授法の学習はほとんどしていないものがある。パリ市制定の特別課程表を適用するためには、師範学科を設けて修学の上、実地教授的な教育を修了したい男女教師に授けるためには、図画に関する資料によること。なお唱歌・体操・手工および裁縫のような諸教科に向けてすでに長い間与えているようにする必要がある。

この師範学科は一八九五年に創立した。したがって毎年の教科を二五課として毎課四時間とする。その各教科を次のように分ける。

一時間でもって教科の間に実施した成果に対して黒板上でそれを矯正する。

一時間でもって物体の性質の分析および平面もしくは空間にこれを表現する種々の方法の分析に関する理論の応用。

他の二時間では、右に示した理論的理解と相対する図画練習。

教科の間に生徒はその授けられた問題に基づいて自己の研究をし、かつその担任している学級において実地授業に従事する。

このように講習した課題を概括すれば、すなわちその示された学科の分析またはその与えられた指示に応じ、かつその形状の類似に夜類集がこれである。

△ 師範学科教育の目的

師範学科講究の目的は主として種々の探求によって視力の敏活を促して観察の精神を発達させ、かつ判断力を養成するために常にその知覚するものを類別して、比較の習慣を養成させることにある。探求と類別との練習を重ねて一度判断力が生まれれば次第に困難な分析の練習を行なうことができるようになる。それは次に掲げた実例で証明できる。この学科を管理するものに常に注意したいことは、少しでも偶然の結果に任せず、最も種々な研究中に各自の創造力を覚醒することである。ただこの研究の範囲は各学級生徒の年齢と知力の発達とにしたがって実際に制限させられることがあるのみである。

この教科の全部は各学級に課程表すなわち形と色とに関する万能的な講究のために規定した課程の発達に従わせるものとする。

練習の次第中にわれわれは左の二面があるのを見る。

一方においては観察の練習すなわち眼の教育がある。

一方においては図写の練習すなわち手の教育がある。

装飾図案の通俗教育（第六議題）

報告員 Imbs（パリ）KellerおよびGuinolot（パリ）

報告者は第六議題に掲げた発議中より左の要点を抄録する。

1. 美術を各々一家の内に普及させる利点がある事。
2. その試験はフランスおよび外国においてすでに行なわれ好成绩を挙げているものがある。
3. 略
4. 女兒に教えるためには自ら模本を立案する方法が必要である。
5. 男児の中にも装飾的趣味の開発を図るべき理由がある。

一 教則

装飾図案科の女子教育に好結果を得ているこの教科を男子の学級に及ぼすときは、生徒に装飾的趣味を養いかつ一種の職業を営む予修を授ける上でその功績が著しいことが女兒におけると異なることを認知した。

よって小学校の図画科の課程中にこの装飾図画科を加える好機であるかどうか、男性教員および女性教員は官制の課程表に規定された図画科と並行してこれを授けられるかどうかについて意見を発表する本会議におけるこの問題が、可決されるか否か、その結果を見るに先立ってなお細かくこの問題を講究することは無用なことではない。児童には規律が必要で、また時としてその鋭気を抑制する必要があるもので、児童の注意力を衰えさせる傾向のある古代彫刻模本の規格的な教則に抵触することなく、また外見上装飾図案の規則と相容れないような幾何式の学習を妨げることなく、うまく新原則に感化しうることを知るべきである。

このことについては、ここに少しも疑いがないけれど、これを決めるのは本会議である。もし、至当の方法のある各種の練習によって解説しやすい規則に基づくときには、よく生徒の注意を喚起することができる。

右の利点のほかなお枚挙しやすい他の利点もある。

装飾図案は

第一 想像と思想とを誘導して趣味を養成し、よって種々の形で各家に美術を普及することができる。

第二 美術的事物に至当の鑑識を付与し、かつ単純な審美の念を養う。

第三 ゆえにその製作で陋劣なものは修美すべきである。

第四 美術およびその様式の歴史的知識を得させる。

第五 起こるべき美術の趨勢を洞察し、またよく美術の遺法を継承させるべきである。

第六 想像かつ新案の製作に対して有識者の感得する創始の觀念および能力の觀念を養成させる。

第七 職工たるものはその自立を確定させるべきである。商人または工業者たるものはその業務を敏活に行なわせるべきである。

この種々の理由の他になお多数の理由を加えることは容易なことであり、本會議員諸氏は多少慎重な態度を取るべきといえども、この教科はついに小中学校または専門学校においてその地位を占めることになることを予想することができる。

生徒の年齢と、その境遇の如何によって、これに供すべき形式・用いるべき順序方法を変化させることは勿論であるが、その教科はこれを自由奔放にさせることはできない。生徒に、することを一任させてはならない。目的もなく教則もなく技術もなく書くようでは、その危険は大きいからである。

二 学科課程

装飾図案はその関係する種々の教科を包括することができる。装飾図案はその原理から言うときはあるいは天然に基づき、あるいは幾何学に基づき、あるいは同時にこの二つに基づくことがある。このことは本會議において、これを決定し、かつ左の分類で適當であるかどうかを宣言すべきである。

装飾図案は左の事項を包括すべき。

- 一 幾何学の講究、ただし線の応用および面の分割による。
- 二 天然物とくに植物の写生。
- 三 本来の図案法および模様に関する法則の知識。
- 四 物の高低を講究すること。ただし塑造による。およびその装飾。
- 五 色の講究。

右の分類の他、装飾の新原則により、その配置よりはむしろ彩色の外観を基とする分類で、本會議において示そうとするものがある。これもここに簡単に説明すると、幾何学はある場合においてはすべての装飾の基礎・標準であるべきもので、線の方向、面および形の限界を示し、または重なる方向を与えるのも、みな幾何学であるということもできる。幾何学は線の配合より生じる装飾を適用し、ほとんど他の力を借りずに図画を起稿することができる。その様式が亜刺比またはモール風に属するもの、あるいはギリシャの「メロウアンジアン」「サクソン」または「メキシコ」模様など種々の図画に属するものを構成することができる。天然物とくに植物は装飾の基本として、その用をなす。したがって植物は装飾術を講究する初頭の地位にあって、幾何学とともにこれを児童にさずける必要がある。幾何学は自然の表現する無数で変化のある類例に対しては退いて、単にその潜在勢力を及ぼすに過ぎないものである。

装飾の花卉が趣味深いのは、その数が多いためではなく、またその形状が稀であるものを探すためでもなく、その大体の構造とその屈曲自在な性質において美観を示すのは、むしろその形の単純さであって、それが誠実な講究をするべき理由である。その葉その花その果実その接合など植物は装飾術が最も富み、かつ美の元素であるゆえんである。植物はこれを研究するのにその主な特徴によってされるべきである。あるいはその輪郭を主として、あるいはその彩色のある外観

を主として、あるいはその全部で、もしくはその細部において、またはその種々の外観において相互の対照価値を主とするなど、その重なる性質についてこれを研究すべきである。

植物の構造のようなものも、これを分解して解釈する必要がある。植物が装飾術において用いるすべての元素中、もっともよく装飾の礼式を備えているものは、その構造は効果の絶対的結果、すなわち生命であるからである。

図案法においては種々の元素を利用するものとする。その元素は幾何学に属するものと、天然に属するものとの間を問わず、これを収集し、あるいは幾何的に、あるいは対生に、または集中し反復し交錯するなどの外観をもって、必ずしも長時間の説明をする必要はなく、装飾模様の原則を応用し、その定める模様を組織する種々の元素について順序に従ってこれを配置してこれを化成するものとする。

色の研究は植物によってする以上のものはない。植物は調色の価値強弱を評定させ植物の色相もしくはその色を組成する元素の正確な価値を発見することは植物による。これは装飾上に応用する着色の原則を定める規則である。ただしこの原則は、敷衍・制限することができる。

隆起装飾 装飾図案の範囲は質朴な教科とはいえ、場合によって工芸美術品、もしくは装飾手工品に有益な応用をして、装飾上の目的としてこれを認めるに至って、はじめて完全に開発させられるといえる。ゆえに物体に描き、または隆起した装飾を学習するときは、実物講習の必要が生ずる。しかしこの講習は生徒が十分に学ぶに耐えるのでなければ効果はない。もっとも、このときに至れば、装飾科はもはや小学教育の区域内に限るべきではない。いっそう高尚な専門の科目となり、この課程表の制限外に出るもののようなものである。しかし単純で適用しやすい手段で斬新な技法の外観のもとに塑造の製作をすることはその例外であるといえる。

市の少ない資力といえ、非常に多くの費用を必要としないこの教科を設立することは容易である。教師が自分の職務に注意しなければならないことは、学校の資力が薄弱であることにかかわらず、必要な材料を集めることができる。ときには教師自身の作品でその用を足すべきである。黒板上に図画略図を示して、形態に相当する装飾を探して、教則的授業の補助とし、これによって趣味の良悪をわきまえ、名工な物体とそうでないものとを区別して、形体が悪いため、または装飾の卑しいために非難を受けやすいものは、これを除去することができる。

ここでもっとも急務であることは、合同授業の講究を始め、今日なお広く行なわれている図手本の使用を全廃することである。装飾図案科の設置はこの結果を生むことで、すでにその利益が大きい。画手本は児童の趣味をそこない、知力を損なうもので、その危害は言うまでもないことであるからである。

あとがき

この報告書の一部から読み取れることを最後に簡単に整理してみたい。

1. 教育方法上の技術として、子どもの学習に補助する教師の図説・板書による略図の必要
2. 未知の事物・抽象的事物理解の直感的理解に図画が果たす役割の認識と必要
3. 文章とともにデッサンは、子どもに真の事物理解をさせ、かつ重要な表象手段であることの認識

4. 自然の写実によって事物に対する観察力・事物と事物との関係・物に対する計量的な理解を涵養させ、それらは他教科の学習にも大きな効果をもたらすという認識
5. 図画の精神集中に及ぼす効果
6. 図画が他教科の間に置かれることによる安らぎの効果
7. 個性重視の効果
8. 自然の精緻な構造の写実による、美的関心の高揚と創造力の喚起
9. 装飾的趣味の喚起並びに美術の普及

等が指摘されており、さらに具体的な改革案を明示している。

1. 初等・中等教育において図画が必要であること
2. 男女を問わず、全児童生徒に必要であること
3. 進学校・非進学校を問わず図画が必要であること。
4. そのための教育養成が必要であること
5. 図手本の使用は、児童の興味・知力を損なうこと

その後、大正期に「自由画」運動と対峙し、図画教育者として論陣を張った白濱等の美術教育観の基底に、こうした図画観があったことは否定できない。